

人間科学研究所通信

Newsletter of the Institute of Human Sciences
Musashino University

第14号

目次

Contents

第一部 ミニ・シンポジウム

- ひきこもりの青年 A による犯罪事例の提示 ————— 2
- 臨床心理学の観点からメンタルヘルスを考える ————— 2
- 社会心理学の観点からメンタルヘルスを考える ————— 2
- 哲学・倫理学の観点からひきこもりを問い直す ————— 3

第二部 おたのしみ

- 柳亭燕路師匠の解説と落語「夜鷹そば屋」 ————— 3



2024年12月1日(日)、武蔵野大学有明キャンパス3号館において、人間科学研究所主催で「ひきこもりについて考える」というシンポジウムが開催されました。第一部はミニ・シンポジウム、第二部は柳亭燕路師匠による落語の解説と「夜鷹そば屋」の落語で楽しく、大変有意義なシンポジウムとなりました。

● 哲学・倫理学の観点からひきこもりを問い直す

哲学者は一種のひきこもりなのではないか、むしろコメントされる側なのではないか。最初はそう思っていたが、ひきこもりについて調べるなかで重要な違いに気づき、哲学はひきこもりの苦悩を和らげる一助になるかもしれない、と思うに至った。

ひきこもりの苦境として、「普通」「当然」「常識」といった言葉に象徴される世間的な価値・規範に適応できず、そのことで自分自身を否定してしまう、ということがよく言われる。しかるに哲学では、ソクラテス以来、価値や規範は真っ先に問い直される主題であり、「何が本当に大事かは誰も知らない」ということが出発点となる。それゆえ、世間の価値・規範への不適応など意に介する必要がなく、自己否定の根拠にならない（結果、ソクラテスは民主政下で告発され刑死したが）。同じく世間に適応できずとも、それを苦しめない考え方があるわけだ。

第二部 おたのしみ

● 柳亭燕路師匠の解説と落語について

重い話題の後味をよくしたいと考え、第2部では落語家の柳亭燕路師匠をお招きした。燕路師匠は早稲田大学教育学部ご卒業後、十代目柳家小三治師匠（のちの人間国宝）に入門され、平成9年に真打に昇進し七代目柳亭燕路を襲名された。中学校などで寄席を開催されることもあり、今回も、高校生や大学生にも馴染みや



● シンポジウムを終えて

シンポジウムを通して、ひきこもりという生き方に対して、社会の側がどのように向き合うのかを考えさせられました。人間は自らの生存環境を大きく変えることができる動物ですが、環境の変化は新たな適応問題を生じます。このような人間特有の問題に対処するには、多面的な人間理解の努力を継続することが必須ではないでしょうか。

武蔵野大学 人間科学部人間科学科 准教授 相松 慎也

しかし、世間的な価値・規範を疑い問い直すことは、誰もが自発的になしうるわけではない。そこでソクラテスは「対話」——1つの主題について対等かつ双方向的に論じ合うこと——によって人々を哲学へと導いた。今も対話は哲学の基本的方法である。ところで、ひきこもりは第三者の介入なしには解決が難しいと言われている。そして必要な介入はやはり「対話」である、と。ならば、哲学的対話は主題と方法の両面で有力な介入となるだろう。それを通して、ひきこもり本人が価値・規範を未決の問題へと差し戻せれば、不適応の苦しみは足場を失うことになる。

そういうわけで、ひきこもるのであれば、ついでに哲学をしてみてほしい。また、それを支える哲学的対話の土壌が社会的に育まれることを願う。

武蔵野大学 人間科学部人間科学科 教授 辻 恵介

すいようにということで、江戸時代の貨幣や時刻、方位などの楽しいご解説の後、知る人ぞ知る人情斬の名作「夜鷹そば屋」をお斬しいただいた。時代を超えて変わらぬ人間の営為のなかにひきこもりについて考えるヒントが——などと半可通なことは書くまい。当日の燕路師匠のご解説と落語は、当人間科学研究所のホームページ上で公開しているので、ぜひそちらをご覧ください。そういえば、落語の登場人物には、ひきこもりがいなかったような……なぜだろうか。



武蔵野大学 人間科学部人間科学科 教授 泉 明宏

今回のシンポジウムは、教室に高座が設けられ、普段とは一味違うものとなりました。ご来場いただいた皆様、ご講演をいただいた先生方、そして燕路師匠に心よりの感謝を申し上げます。当日お手伝いいただいた学生諸氏にも、この場を借りて御礼申し上げます。

第一部 ミニ・シンポジウム

● ひきこもりの青年 A による犯罪事例の提示

酒乱の工員の父と情緒不安定な専業主婦の母の間に生まれ、幼少時から引っ込み思案だった。発達の問題はなかったが学業成績は振るわず、小学校高学年ころから母や弟への家庭内暴力が出現した。中学3年時には父母が離婚して父が家を出た。離婚後、母は介護職に就いたが、生活苦から一家心中を口にして灯油を持ち出したこともあった。

A は地元の県立高校に進学したが、じきに不登校になった。母は健康福祉センターで相談したが、結局、A は高校を中退した。地域の精神科を受診したこともあったが、精神障害とは見なされず通院には繋がらなかった。通信制高校での学習やコンビニでのアルバイトも続かず、16 歳ころから自宅にひきこもり、パソコンでゲームやチャットをしたり、ひきこもりになった原因を考えたりして日々を過ごした。母の交際相手が同居したこともあった

武蔵野大学 人間科学部人間科学科 教授 辻 恵介

が、状況は変わらなかった。やがて、A はほとんど自室から出なくなり、近隣の人々にも存在を忘れられた。

母と弟は、A の引きこもりや家庭内暴力に悩み、A を怒らせないよう気を遣っていたが、やがて強く出るべきだと考えるに至った。母はAに対し「家を出て行け、縁を切る」と宣告した。A は母に翻意を求め、弟に間に入ってもらおうとし、それが叶わぬとなると、台所にあった包丁で弟に刺しかかった。

傷を負った弟が屋外に退避すると、A は母に謝罪したが、叱責されて逆上し、何度も包丁を振り下ろして母を殺害した。犯行後、A は、家から追い出されそうになってやった、ひきこもっていたときより学生時代の方が辛かった、勾留されている今が一番マシ、これでよかったと思うこともある、などと語った。

● 臨床心理学の観点からメンタルヘルスを考える

メンタルヘルスの観点からひきこもり状態を理解する場合、ストレス対処の視点が有用であると考えられる。たとえば、私たちは日常生活において心理的ストレスがかかる出来事を経験することがある。その際、一時的に「ひきこもる」という選択は、自然なストレス対処の1つといえる。しかしながら、この「ひきこもる」というストレス対処が長期にわたると、メンタルヘルスが悪化したり生活の質が低下したりする可能性がある。ひきこもり状態が長期化する背景を理解するためには、個人要因ばかりでなく、家族要因や経済的要因、さらには教育や仕事などに関する社会文化的要因といった多様な観点からの議論が求められる。こうした多面的

武蔵野大学 人間科学部人間科学科 准教授 野中 俊介

な視点は、人間科学的なアプローチとの親和性が高いといえる。

ひきこもり状態にある人の一部においては、家族への支配的言動や暴力的行動が報告されているが、犯罪行為が多いことを示すデータはほとんど存在しない。近年では、いわゆる「8050 問題」のように、ひきこもり状態にある人の高齢化が注目されている。これによって、本人ばかりでなく家族全体が社会から孤立し、親亡き後に状況がさらに悪化する可能性が指摘されている。ひきこもり状態にある本人の相談から支援が始まるケースは少ないため、本人への直接的な支援だけでなく、家族全体の孤立を防ぐ支援も重要であると考えられる。

● 社会心理学の観点からメンタルヘルスを考える

武蔵野大学 人間科学部人間科学科 講師 福沢 愛

社会心理学では多くの場合、特に疾患等のない、社会生活を送れている人を対象に調査や実験を行うため、所謂「ひきこもっていない人」を対象にした研究がほとんどである。しかし、ひきこもっていない人において質問紙調査を行い、ひきこもりリスク高群と低群に分け、両者の平均的な傾向を比較する社会心理学的研究は行われている。そうした研究によると、ひきこもりリスク低群の大学生は、ある課題に失敗した後の方が、成功した後よりもより動機付けが高まるのに対し、ひきこもりリスク高群の大学生は、失敗後に動機付けが低まるという傾向が明らかになっている。ひきこもりリスク高群のこの傾向は、約30年前の日本とカナダでの比較文化心理学的研究で見られたカナダ人の傾向と類似していた。一方で、ひきこもりリスク低群の日本人には集団主義得点

が高く個人主義得点が低い傾向があるのに対し、ひきこもりリスク高群の日本人は集団主義得点も個人主義得点も低い傾向が知られている。そのためひきこもりリスク高群は、いわゆる「平均的な日本人」の価値観を持たず否定するものの、とは言えカナダのような欧米文化圏の価値観を取り入れているわけではないことが指摘されている。

リスク低群とリスク高群を比較することは、今後の臨床心理学的介入のためのヒントを得ることにつながるだろう。同時に、ひきこもりリスクの低いいわゆる「普通の日本人」の心理的傾向が長期的にもウェルビーイング維持につながるのか、についての知見も、今後継続して検討されるべきと考えられる。

2024(令和6)年度人間科学研究所 研究員一覧

	氏 名	所属等
所 長	辻 恵介	本学人間科学部長兼人間科学研究所長
運営委員	泉 明宏	本学人間科学部教授
	城月 健太郎	本学人間科学部教授
	渡邊 浩文	本学人間科学部教授
	中島 聡美	本学人間科学部教授
	菊池 安希子	本学人間科学部教授
	渡辺 裕一	本学人間科学部教授
	五島 直樹	本学人間科学部教授
	北 義子	本学人間科学部教授
	野口 友紀子	本学人間科学部教授
	矢澤 美香子	本学人間科学部教授
研究員	一ノ瀬 正樹	本学ウェルビーイング学部教授
	岩本 操	本学人間科学部教授
	小嶋 知幸	本学人間科学部教授
	小西 聖子	本学人間科学部教授
	西本 照真	本学ウェルビーイング学部教授
	北條 英勝	本学人間科学部教授
	大崎 広行	本学人間科学部教授
	小俣 智子	本学人間科学部教授
	木下 大生	本学人間科学部教授
	熊田 博喜	本学人間科学部教授
	小高 真美	本学人間科学部教授
	相松 慎也	本学人間科学部准教授
	小杉 裕子	本学人間科学部准教授
	出野 美那子	本学人間科学部准教授
	野中 俊介	本学人間科学部准教授
	日野 慧運	本学人間科学部准教授
	中西 真	本学人間科学部准教授
	永野 咲	本学人間科学部准教授
	上間 清司	本学人間科学部講師
	中山 千秋	本学人間科学部講師
	畠山 恵	本学人間科学部講師
	福沢 愛	本学人間科学部講師
	櫻井 真一	本学人間科学部講師
	浅野 敬子	本学人間科学部講師
	佐々木 洋平	本学人間科学部助教
	志磨村 早紀	本学人間科学部助教
	成澤 知美	本学人間科学部助教
	羽毛田 幸子	本学人間科学部助教
	清水 潤子	本学人間科学部助教
	柳 延希	本学人間科学部助教
	岡 寿子	本学介護福祉別科教員
	松本 真一	本学介護福祉別科教員
	小野内 智子	本学介護福祉別科教員
客員研究員	橋本 修左	本学名誉教授
	北岡 和彦	本学名誉教授
	大山 みち子	本学名誉教授
	小西 啓史	本学名誉教授
	藤森 和美	本学名誉教授
	野村 信夫	本学客員教授
	狐塚 順子	本学客員教授
	堀越 勝	本学客員教授
	小松 美智子	本学客員教授
	磯貝 隆夫	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター 教授
	小原 収	本学客員教授、かずさ DNA 研究所 副所長
	菅野 純夫	本学客員教授、東京大学 名誉教授、千葉大学 未来医療教育研究機構 特任教授
	夏目 徹	本学客員教授、産業技術総合研究所 生命工学領域
	新家 一男	本学客員教授、産業技術総合研究所 最先端バイオ技術探求グループ グループ長
	宮崎 純一	本学客員教授、大阪大学 産業科学研究所 特任教授（名誉教授）
	山崎 美貴子	本学客員教授、明治学院大学名誉教授、神奈川県立保健福祉大学名誉教授
	山本 雅	本学客員教授、沖縄科学技術大学院大学 細胞シグナルユニット 教授
	家村 俊一郎	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター 教授
	河村 義史	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所 特別研究員
	若松 愛	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所 特別研究員
	熊谷 亮	プロテオブリッジ株式会社 代表取締役
	小林 慎	産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 主任研究員
	福田 枝里子	産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 分子細胞マルチオミクス研究グループ 主任研究員
	加藤 伸弥	神戸学院大学心理学部 講師

武蔵野大学人間科学研究所通信 | 第14号 |

Newsletter of the Institute of Human Sciences Musashino University

企画編集・発行 / 武蔵野大学人間科学研究所 発行日 / 令和7年3月31日

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World



www.musashino-u.ac.jp

武蔵野大学 人間科学研究所
〒135-8181 東京都江東区有明 3-3-3
Tel.03-5530-7448